
BIOHAZARD ~英雄の転生~

RAI

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

BIOHAZARD ～英雄の転生～

【Zコード】

N5033Y

【作者名】

R A I

【あらすじ】

ある日、俺は転生することになった…

転生した俺は、その世界で…

プロローグ（前書き）

残酷な描写があるかもしれません。

苦手な方は閲覧をおやめください。

プロローグ

「俺は……確かに存在していた。」

「BIG BOSS（ソロシードスネーク）と肩を並べた英雄『SHARK』として……」

「そうだ。思い出した！俺はあの時、前線に行つて直接部隊を指揮していた……」

敵、戦車3機との交戦だった。

俺は部下に対戦車ミサイル（ジャベリン）を用意させそれで勝負は付く……そう考えていた。

部隊を配備させ、攻撃命令を出す。そう考えたときには、意識が無くなっていた。

そして今、田覚めたら限りなく白に近い空間にいた。
田の前にヒト？が立つている。

？「田覚めたか？」

「ああ、それよりも俺がどうなっているか教えてくれないか？」

？「お前は死んだ」

「え……？」

俺は本気で動搖していた。俺が指揮していた場所は、周囲も確保してあり安全なところのはずだ…何故?

「じゃあ、なんで俺は死んだんだ?」

？「私が訳あつて殺した」

一発殴つてから訳を聞いたかつたが、怒りが湧いてこない…

「…? ここは?」

?「現世と靈界の中間辺りだ」

「あんたは?」

神「神だ お主らで言つ『転生』を行つ神だ。実は、ある世界でのバランスが崩れかけている。誰かが転生したせいでは

「そこが崩れたらどうなるんだ?」

神「周りの世界を伴つて消滅するだろ?。だから、お主に頼みがある。その世界に行って他の転生者を倒してきて欲しい」

「理由は分かった。けど、何故俺じゃなきゃならないんだ? BIG BOSSの方が強いぞ?」

神「実は、他の転生者というのはリキッドスネークだ。手を下せなかつたら困るからな…。それより、行くのか行かないのか?また元の世界に戻すことはできないからここで暮らすか、行くか…だ」

「分かった、行こう」

神「それと、これからお主が行く世界は、ちょっと常識が通じないのでな。何か欲しい特殊な物とかはないか?」

「ん~、そうだな… BIG BOSSが使つてることじくらでも銃器、弾薬が入る鞄、後はいくら使つても金が出てくる財布ぐらいかな?」

神「分かった。墮ちたら部屋の中に置いてある。ある事件が起つた二ヶ月前に飛ばす。じゃあな」

次の瞬間、俺は文字ひとつ『墮ちて』いた。

プロローグ（後書き）

初投稿です。

文章力無いので誤字あるかもです。

そうゆうのは気にせず読んでください。

次回もよろしく！

第一章 第一部 始まり（前書き）

少々グロテクスな表現が使われていることがあります。

苦手な方は閲覧をお控えください。

第一章 第一部 始まり

目覚めた俺は、柔らかいベッドの上に寝ていた。

部屋は、クリーム色を基調とした暖かい感じの部屋だ。

神が行っていたとおり、ベッドのそばには机が…その上には肩に掛けられるような鞄と財布が置いてあった。

近づいてみると、鞄の上には紙がのっていた。

『これを読んでいるということは目覚めたのか。今は、事件の二日前だ。ここはラクーンシティの中心部にあるマンションの部屋だ。ここがお前の部屋となる。

事件は、ラクーンシティ郊外で化け物が出るところから始まる。それは、感染病のように一気に広まり噛まれ、死んだものは「生ける屍」として、おさまらない食欲を満たそうと襲つてくる。

原因は、大企業のアンブレラが起こした事故だ。

しかし、お主がその心配をする必要はない。そのウイルスは私が防ぐからな。

鞄の中には、M92F、M4A1カービン、RPG-7を入れていた。足りないものは買い足してくれ。

Good Luck!』

「なるほど。だが、俺はリキッドを倒せばいいだけだからな。」

そう呟いて、俺は準備を始めた。

「武器は、貰ったのに加えて、『M92F』、『M93R』、機銃『M60』、
ショットガン『M10』だな。」

「他には、手榴弾を5個ほど。」

銃や弾薬は、正規のルートではなく入れにくいので裏の武器商人から
買つた。

まあ、全員に「戦争でもおっぱじめるのか?」と聞かれたが……

いろいろあつて、あつという間に一ヶ月が過ぎた。最近の新聞には
『死人が歩く!』などの記事が目立つ。

「いよいよ、始まるか……」俺は、ボソつとつぶやいた。

新聞を読んでから四日後……街ではヒトが人を喰らう事件が多発。
バイオハザードが発生した。

R・P・D・も壊滅状態、街は混乱へと陥つていった。

「そろそろ動くか……」俺は、街へと繰り出した。街では、今だ抵抗
を続けている人の銃声が聞こえてくる。

とりあえず俺は、田の前のゾンビを倒しながら進んでいく。神には、「頭以外を撃つてもダメージは与えられない。倒したければ頭を撃ち抜け！」と言われた。

俺は、冷静に自分の感覚を信じて連續で頭を打ち抜いていく。もつとも、打ち抜いた瞬間の『ぐちゃつ』と言つ音には慣れないが…とにかく俺は、神も言つていた『アンブレラ』がある街の中心部へ向かって歩みを進めていった…

第一章 第一部 始まり（後書き）

なんとか書きました。

テスト近いな・・・w

次回でパートナー的な出します！ジルにするか、クレアにするか
まだ悩んでいます。

駄文ですがお願いします m(—)m

第一部 出会い

俺は、街の中心部へ路地を北へと進んでいた。すると突然、左側に衝撃を受けよろけた。

「敵か?」という疑念を抱きながら、左を見ると一人の女性が座っていた。（こけて、座りこんでいた?）

彼女の真後ろには、6~7体のゾンビが、俺は鞄からM60を引っ張りだし、狙いもつけずに乱射した。すぐに先頭にいたゾンビは挽肉となり後ろにいた者もヒートという形を留めていなくなつた。

M60の反動の手の痺れが取れないまま、ぶつかってきた女性に話しかけた。

「俺はSHARK。あんたは?」

ジル「私はジル・バレンタイン。この街の警察にある『S.T.A.R.S.』の一員よ。助けてくれてありがとう、SHARK」

「S.T.A.R.S.ってあの名高いS.T.A.R.S.か?」

ジル「ええ」

「じゃあ、なんで追いかけられていたんだ?」

ジル「実は、ジャム（弾づまり）を起こしちゃつて……」

俺は無言で鞄の中へ手を突っ込みM92Fを手渡した。

ジル「……?」

「銃、ないんだろ?」

ジル「……ありがとう……」

このとき俺は、自分の不器用さに腹が立つた。もっと、気の利いた言葉があつただろうに……

とにかく俺は、ジルと一緒に行動することになった。女性とはいえ、S·T·A·R·Sで働いていたベテランだ。まだ、役に立つだらう程度にしか考えていなかつた…

歩き始めてから大分立つ、そろそろ『アンブレラ』が見えてくる頃だろう。そう思った矢先に前からヒトが歩いてくる。おおよそ2mを越すであろう巨人である。俺の身長が180だから近くに立つたら見上げる形になるだらう。と、ジツでもいい事を考えながらM9 2Fの引き金を引く…

弾は顔面に着弾したはず…しかし、奴は銃撃をものともせずにそのままゆっくりと接近していく。

俺は、弱点の頭を狙うのをやめて体に銃口を向けてみた、しかし防弾コートを着ているようで弾は全てはじかれてしまつ…

「逃げるぞー、ジル！」

そう言って俺たちは、反対側に駆け出した…この後、奴が『スタアアアアズウウウ』と叫んだのに気付かなかつた…

数分後、俺たちは森の中にいた。鍛えている俺でも息が軽く上がっている。ジルにとつてはかなりキツイだらうと思いしばらく休憩を

ところにした。

「しばらく休憩を取らう。」

ジル「いいえ、ここは危ないわ。周りに茂みもあるし、いつどこから飛び出してくれるか分からない！」

何が?と聞きたかったが危ないと叫ぶことなのにかく移動することにした…

さらに数分後、民家の中にいた。中の安全を確かめてから、入口を机などで塞いだ。

「なんで危なかつたんだ? 何も気配がしなかつたけど?」

ジル「犬よ」

「犬?」

犬なら、軍用犬として2匹飼っていたことがある。

ジル「犬もウイルスに感染しているのよ」

「ふむ…」

表面では落ち着きを保つていたが実際は怯えていた。

今までに戦つてきた相手は人間であつたり、戦車であつたりと必ず正体が分かつていた。

しかし、今戦つている相手すら何者か分からないのだ…

「そういえば、ゾンビについて詳しいな。」

ジル「ええ、ラクーンシティ郊外の洋館で事件があつたの。S・T・A・R・S・のチームが行方不明になつてね…。その洋館でゾンビと戦つていたの。」

「なるほど。だからゾンビの弱点を…」

そのあとは他愛もない会話を繰り返し、夜になると順番で見張りをして寝た…

第一部 出会い（後書き）

キャラはジルに決まりました！

理由は「単に好き！」だからです！

誤字あるかもしません。温かい目でスルーしてください。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5033y/>

BIOHAZARD～英雄の転生～

2011年11月17日21時43分発行